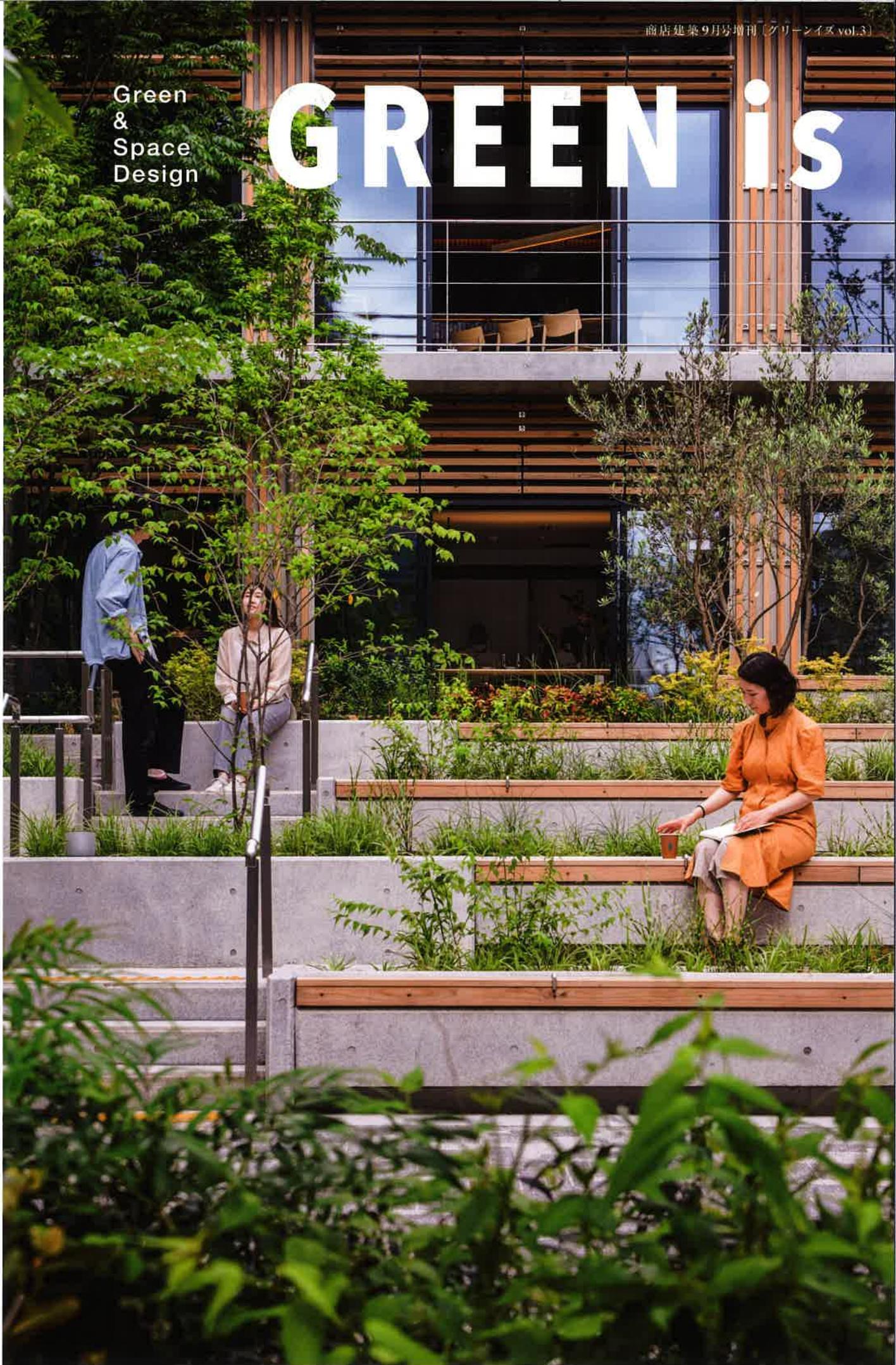


GREEN is

Green
&
Space
Design

vol.
3

みどり
で
つな
がる
空間
デザ
イン



まちに開かれた居場所に 生まれ変わった都市公園

「ブルーボトルコーヒー 渋谷カフェ」が入る
渋谷区立北谷公園は、Park-PFI制度で2021年4月に再整備され、
エリアを活性化させる設計と運営がなされている。
都心でみどりと共に過ごせる場所は、どうつくられているのか。
公園の指定管理者「しぶきたパートナーズ」のメンバーに聞いた。

取材・文／梶原博子 撮影／山内紀人



北谷公園は、Park-PFI制度を利用してリニューアルされた。以前の公園にも存在したケヤキをシンボルツリーとして配している

うっそう 鬱蒼とした公園をまちに開く工夫

東京・渋谷区初のPark-PFI事業として2021年4月1日にリニューアルした「渋谷区立北谷公園(以下、北谷公園)」。Park-PFIとは都市公園法改正により、17年から設けられた制度で、飲食店や売店などの公園内施設の設置と、その施設で生じた収益を活用して、公園内の整備や改修を一体的に行う者を公募により選定する。19年、渋谷区は、渋谷駅から徒歩圏内で、北側に代々木公園が控える神南エリアに位置する敷地面積960㎡あまりの「北谷公園」の改修事業を、Park-PFIを活用して広く公募。審査を経て、東急、日建設計、CRAZY AD(クレイジー・アド)の3社による企業コンソーシアム「しぶきたパートナーズ」の案が採択された。

改修では、日建設計が建築とランドスケープの基本設計を、東急建設が実施設計を担当。竣工後は「しぶきたパートナーズ」が指定管理



ステージエリア方向に公園を見通す。舗装の一部には、東急線で使用されていた枕木を敷いた

業務に当たる。

改修前の北谷公園は、木々が鬱蒼として日中でもうす暗く、駐輪や喫煙のみを主な目的として利用されていた。それは「公園の中にアクセスするところが周縁の7%しかなかった点も大きな要因だった」と、基本設計にあたった日建設計の大庭拓也さんは話す。そこで改修では、周縁の17%を外部に開くように計画した。高低差が3m以上ある地形を生かし、高台に飲食店が入る建築を、一番低い位置に広場を配置し、その間を階段でつないだ。階段の一部はステップ状のベンチと植栽帯で構成。公園の休憩エリアや、カフェで購入したコーヒーを飲める客席の役割も果たしている。

アクティビティを前提としたデザイン

公園内には「ランウェイエリア」「ステージエリア」「大屋根エリア」を設け、その場で行

われるアクティビティを前提として建築とランドスケープのデザインがなされている。それぞれの場で起こる行動やイベントを想定し、日常時は休憩スペースに、イベントなどの非日常時には客席になるように、最適な場所にベンチを配置した。大屋根エリアに置かれた可動式のプランターとベンチは、ブルーボトルコーヒー側からの提案で実現したものだ。建築の開口部の大きさや位置なども、店舗の内装設計を手掛けた芦沢啓治建築設計事務所とやり取りしながら設計を進めた。

「今回のプロジェクトは、公園のあるべき利用のされ方についてプロジェクトメンバーで共有できていたこともあり、建物の内外がかかわらず、シームレスな使い方ができる方向に舵を取っていくことができました」と、企画運営を担当する東急の西嶋健太郎さんは話す。

「北谷公園」に居心地の良さを生んでいるのがグリーンが存在だ。従来の都市公園では管理がしやすい常緑樹をメインに植栽することが多いが、「北谷公園」では落葉樹も織り交ぜて多様な構成となっている。「以前の公園にもあったケヤキをシンボルツリーとして、在来種を中心に、自然になじみ、季節を感じさせるサクラ、ケヤキ、モミジ、サルスベリなどを植えています。植物を愛でる余地を生むことは、100年先を見据えた公園のみどりの在り方だと思います」と日建設計のランドスケープデザイナーの仁科力蔵さんは話す。

「しぶきたパートナーズ」として、東急は公園のマネタイズや管理を、日建設計はエリアマネジメントを、CRAZY ADはフードトラックやイベントの誘致を担い、3社の強みを生かしながら、地域と連携し、イベントなども企画していくという。「北谷公園」のような1000㎡以下の小規模公園は都市部に数多く存在する。今回の取り組みはそうした公園を人の居場所として改修する一つのモデルケースとなるはずだ。

環境と つながる 宿泊

CHAPTER

4



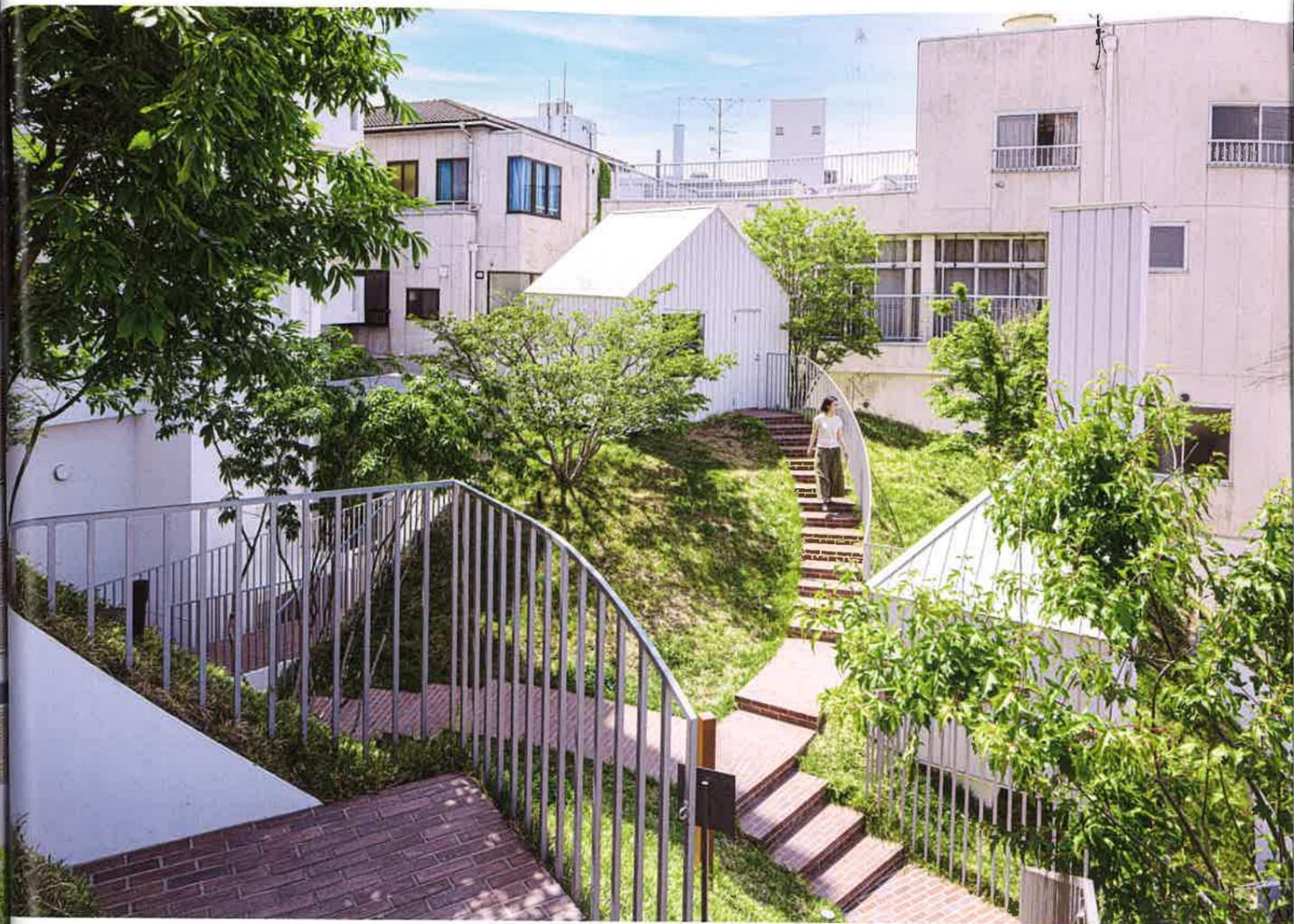
滞在を通して、まちを感じたり、自然に思いをはせたり、ホテルの空間を通じて、その向こうに広がる環境を感じさせる。グリーンにより、環境そのものにつながるような宿泊体験を与える設計を取り上げる。

街とつながり、人の居場所となる 環境を生むホテル

白井屋ホテル

設計 / 藤本壮介建築設計事務所
植栽計画 / SOLSO
撮影 / 青木勝洋

群馬・前橋の中心市街地活性化の
きっかけとなることを企図した「白
井屋ホテル」。新築されたグリー
ンタワーは、利根川の旧河川の土
手を復し、法面緑化されている



建築と街が溶け合い、環境を緩やかに覆う

群馬県前橋市の中心市街地に建つ「白井屋ホテル」は、老舗旅館だった建物を改修したヘリテージタワーと、新築のグリーンタワーからなる。前橋の「まちなか」を活性化しようと、前橋出身の起業家・田中仁さんの声掛けで、多くの国内外のクリエイターが携わっている。建築設計は、藤本壮介建築設計事務所が担った。「建築と街は今、どんどん溶け合い始めていると感じています。建築物が閉じてぼこんと立つのではなく、どこまでが建築で、道で、広場で、丘で、森なのかよく分からないものが、我々の環境を緩やかに覆っていくとなると面白い」と藤本壮介さんは話す。

グリーンタワーは、前橋市の街のビジョン「めぶく。」にも呼応するような、緑化された土手として設計された。既存建物のある大通り側との高低差を解消し、異なる街のスケールをつなぐ、だれもが通り抜けられる道として開かれている。「グリーンタワーの丘は、何かがまさに芽吹き始めているような、力強

い生命力が出てくると良いと思って計画し、それが実現しています」(藤本さん)

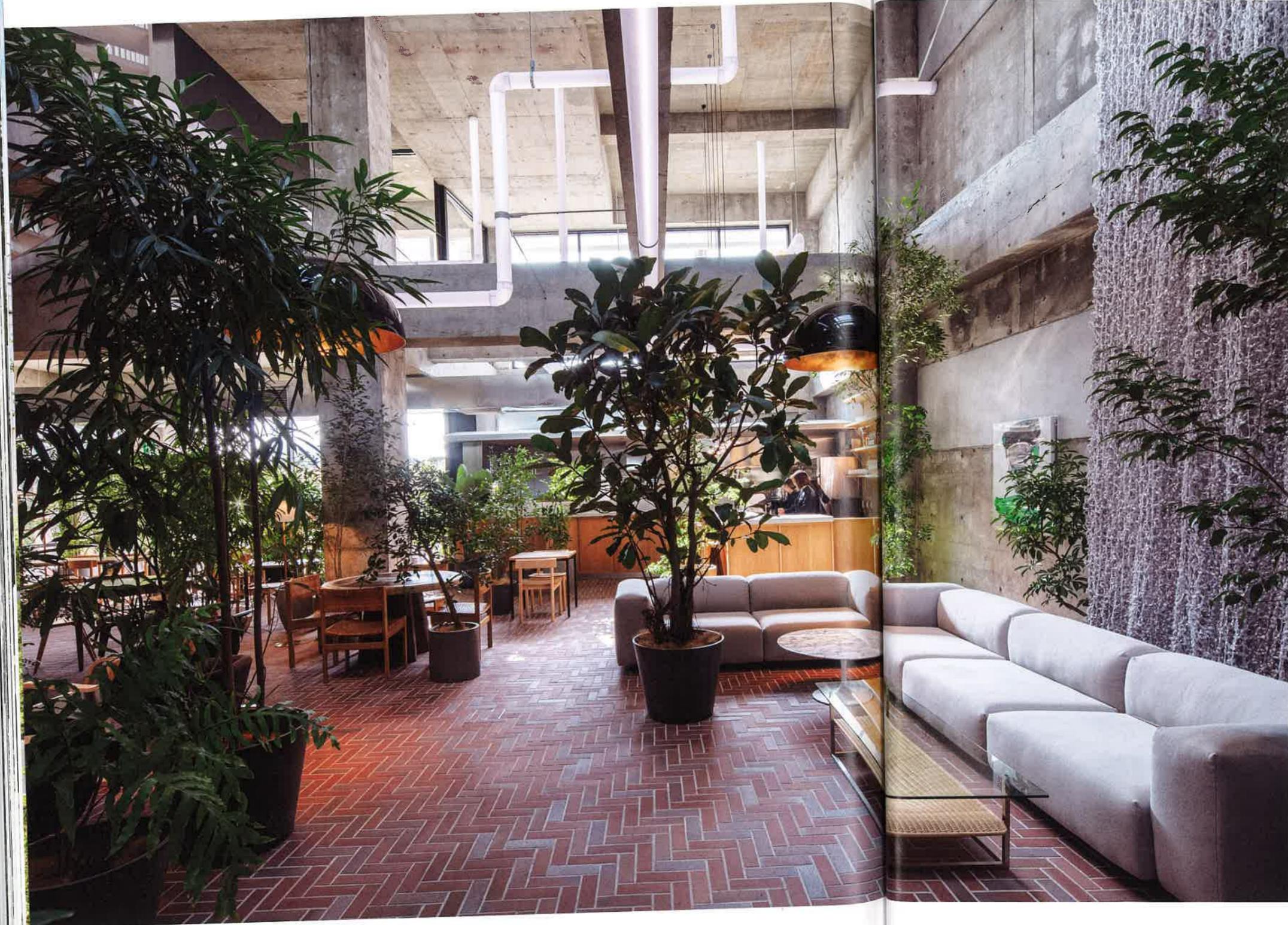
ヘリテージタワーは、RC造の既存建物を4層にわたって床や壁を解体し、吹き抜け空間とした。「街のリビング」として設計され、植物が人々の居場所を緩やかに仕切るように置かれている。「ここでは生態系のような豊かな全体をつくっており、それは建築だけでは実現できませんでした。道や広場、森が建築と溶け合い、更にアートや家具、カーテン、生きた植物の生命力など、多様なものがそれぞれの良さを引き出すことで生まれたものです。柱梁によって空間の奥行きがつけられており、そこに植物が入ることで、人間的で落ち着いたスケール感になっています。また、植物により、内部でありながらも外部的な開放感が生まれることも期待しています」(藤本さん)。「白井屋ホテル」は、街の環境の一部として、さまざまな人の居場所となっている。

(編集部)

大通りとヒューマンスケールな通りをつなぐことを意図し、だれでも通り抜けられるパブリックな道となっている。白い小屋の一部は東屋やサウナとして機能する



グリーンタワーの道は大通りに面するヘリテージタワーへと続く



左／既存建物を改修したヘリテージタワー1階のラウンジ「the LOUNGE」。随所に配した植栽が間仕切りとして機能する。ラウンジやオールデイダイニングとして、宿泊客以外も利用できる。上／大きな吹き抜け空間には、グリッド状の柱梁による構造体と対比するように、らせん階段や対角線に伸びるブリッジが交錯。高さ約8mのベンジャミンの木が伸びる。吹き抜けに張り巡らされた配管アート「ライティング・パイプ」は、レアンドロ・エルリッヒ氏によるもの。下／柱梁による空間の奥行きに植物が入ることで、ヒューマンスケールでゆったり過ごせる空間となることを意図した。



上/1階メインダイニング「the RESTAURANT」。内装設計はエスキスの甲斐晋介さんが手掛けた。植栽がラウンジやエントランスと隔てるように配され、周囲からの視線を遮る。下/藤本社介さんが手掛けたスペシャルルームの客室。イスやテーブル、壁面などにベンジャミンの枝を配した。他に、レアンドロ・エルリッヒ、ジャスパー・モリソン、ミケーレ・デル・ルッキがデザインした客室がある

— DATA

所在地：群馬県前橋市本町2丁目2-15
 設計協力：スペシャルルーム内装設計 Leandro Erlich Studio(共用部アート含む) Jasper Morrison Ltd. Michele De Lucchi and AMDL CIRCLE レストラン内装設計 エスキス 特別個室設計 新素材研究所 設備・構造計画 石井設計 照明計画 LIGHTDESIGN 備品・インテリアスタイリング 長山智美 テキスタイル 安東陽子デザイン サイン nanilani
 施工：冬木工業
 植栽施工・管理：ヘリテージタワー/SOLSO+前橋園芸 グリーンタワー/大林環境技術研究所(法面緑化) SOLSO+前橋園芸(高木)
 植栽管理方法・メンテナンス頻度：グリーンタワー/自動灌水 月1回

〈ヘリテージタワー (既存棟)〉
 用途地域：商業地域
 建ぺい率：実効87.76%<制限90%
 容積率：実効212.03%<制限600%
 構造と規模：RC造 地下1階地上4階建て
 敷地面積：812.98㎡ 建築面積：713.53㎡
 床面積：1744.52㎡/地階159.15㎡ 1階474.52㎡ 2階345.02㎡ 3階369.61㎡ 4階372.24㎡ 屋上階23.98㎡

〈グリーンタワー (新築棟)〉
 工事種別：一戸建て 新築
 用途地域：商業地域
 建ぺい率：実効78.51%<制限80%
 容積率：実効103.83%<制限600%
 構造と規模：RC造 地上5階建て
 敷地面積：778.08㎡
 建築面積：610.86㎡
 床面積：820.94㎡
 工期：2017年8月～2020年5月

— 営業内容
 開業：2020年12月12日
 チェックイン/アウト：午後3時/午前11時
 電話：(027) 231-4618
 経営者：白井屋ホテル(株) 矢村功
 客室数：25室/ヘリテージタワー17室 グリーンタワー8室
 客室料金：3万250円～

— 主な仕上げ材料
 屋根：コンクリート下地シート防水仕上げ
 外装：ヘリテージタワー/コンクリート下地弾性塗料 塗装(セラミック/エスケイ化研) グリーンタワー/ガルバリウム鋼板貼り(BLアートサイディング/セキノ興産) 開口部/高性能省エネサッシシステム(アームス/三協アルミ)
 外構：レンガタイル貼り(TLCアソシエイツ) グリーンタワー/大林式緑化工法(大林環境技術研究所)
 床：カーペット敷き(FG7151/東リ) ラウンジ/コンクリート下地レンガタイル貼り(TLCアソシエイツ)
 幅木：MDF下地ウレタン塗装
 壁、天井：PB下地EP
 プランター：ファイバーセメント ポリプロピレン(ヤマテ)

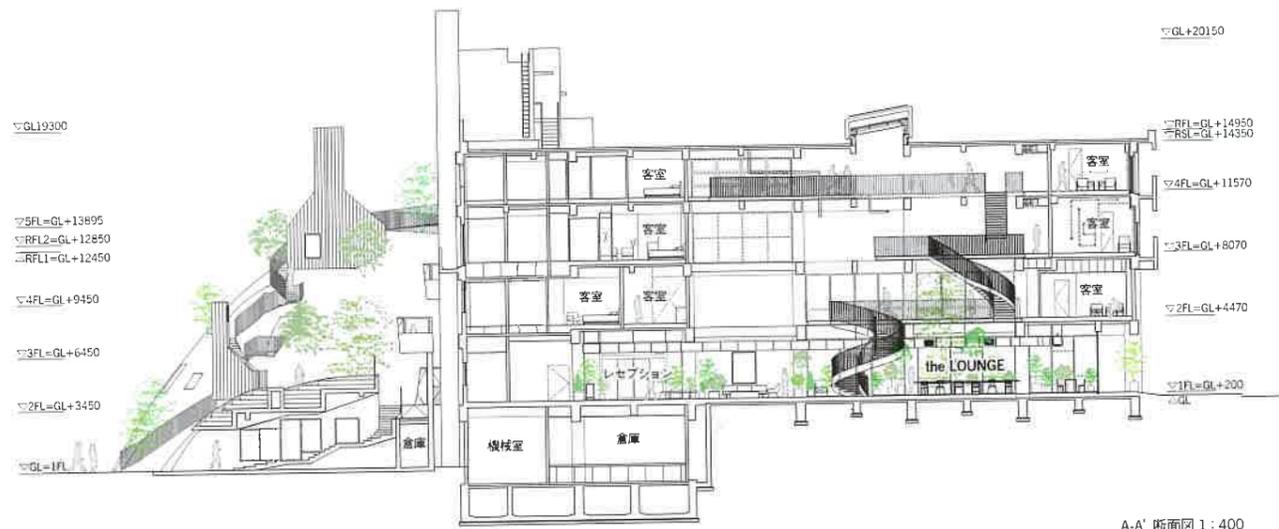


— 植栽リスト

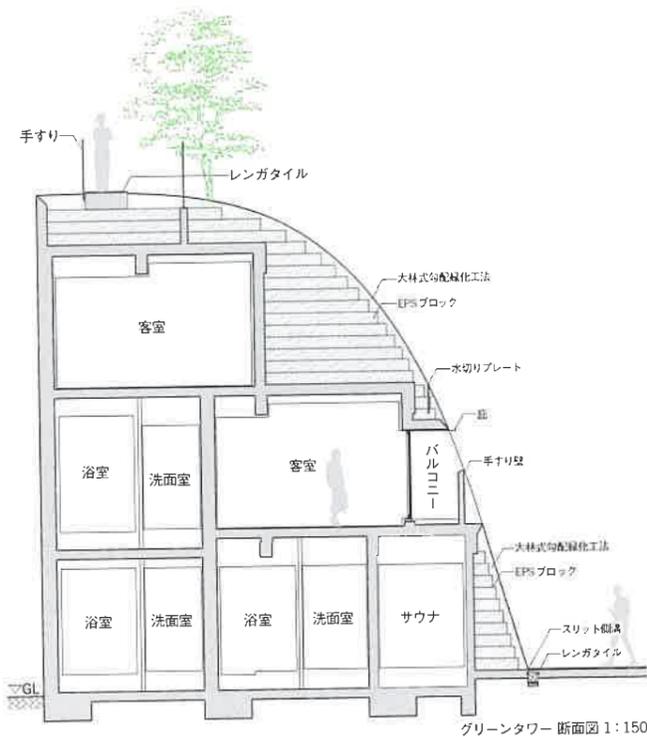
敷地を南北に通るパサージュを大通り方向に見通す。地域住民の抜け道としても利用される



- グリーンタワー
 - 1.イロハモミジ
 - 2.ジュンベリー
 - 3.ノリウツギ
 - 4.アオハダ
 - 5.ヤマモミジ
 - 6.コナラ
 - 7.ハナズオウ
 - 8.アオダモ
 - 9.ニシキギ
 - 10.アブラチャン
 - 11.シマサルスベリ
- ヘリテージタワーロビー
 - ブラッサリア
 - エバーフレッシュ
 - シェフレラ アングスティフォリア
 - ツビタンサス
 - アマゾンオリーブ
 - ショウナンゴム
 - ベンジャミン
 - カシワゴム
 - ベンジャミン ヌダ
- パサージュ
 - ヒメノウゼンカズラ
 - ハイノキ
- オニヤブソテツ タマシダ タニカヤブラン エバーグリーン ジャイアント 法面緑化/ノシバ ヨウシバ(4種類)
- クロコダイルフーン フィカス ストリクタ ポストンフーン ボリボジウム ナギ ブラッサリア ガジュマル ゲッキツ オーガスタ グレビレア ロブスター バンノキ
- イリシウム シジギウム アデク ウツギ リンボク 常緑モミジ 常緑マユミ キソケイ 金毛ツツジ ヒメシャラ モミジ マホニア コンフューサ ウンナンオウバイ ヒメノウゼンカズラ エリナカステード コバズイナヘンリーズ
- ガーネット プリベット センセーション フォッサギラ グレビレア ロブスター ヤブラン エバーグリーンジャイアント ウンナンオガタマ
- ファサード
 - 常緑モミジ
 - ツタ類/ブミラ、ナツツタ、キツタ、ヘンリーツタ
 - 下草/ディアネラ、タマシダ、ヒメツルソバ、ヒメツルニチニチソウ、アスパラガス プルモサス、ワイヤーブランツ



A-A' 断面図 1:400



グリーンタワー 断面図 1:150



グリーンタワー法面緑化部 詳細断面図 1:15

(CLOSE-UP) 自然な丘をつくる法面緑化の技術

地形のような建築が実現している「白井屋ホテル」のグリーンタワーの法面緑化には、大林式緑化工法が採用されている。これは大林環境技術研究所が開発する緑化工法で、スギ・ヒノキの樹皮を土壌へと加工したEソイルを使用するものだ。保水能力と吸水能力が高く、薄い基盤でも植物が生育することが可能。また、Eソイルの繊維質が絡み合うため、急勾配でも地滑りにくく、スギ・ヒノキの殺菌作用により、農薬をほとんど必要としないという特長を持つ。

大林環境技術研究所の大林武彦氏は「白井屋ホ

テル」のグリーンタワーは北側に面し、日照が十分でない中、シバの生育性をどう確保するかが挑戦でした」と話す。日照に強い日本古来のノシバをメインに、それに加えてヨウシバを4種類、自動灌水の水の流れや高木の位置、風の流れなど、生育条件によって植え分けをしている。メンテナンスは月1回、大林氏が担っている。「自然な丘」という設計イメージから、自生する雑草なども残り、状況に応じて調整を行う。開業から半年過ぎ、風に運ばれてきた草花が芽吹き、四季の変化を感じられる丘となっている。

(編集部)



NO. / 12

京都の繁華街で自然を感じ、環境への意識を促す

GOOD NATURE HOTEL KYOTO

設計/内装 design farm DRiP 藤井崇司 瀧口翔太 藤木慶一 中野晴風
 建築基本設計・設計監理監修 東畑建築事務所 岡島博明 大谷健司 松森綾江
 建築実施設計・工事監理 大林組一級建築士事務所 伊藤直幸 箕浦浩樹
 植栽計画/タイナカ_オフィス
 コバヤミドリ(壁面緑化)

撮影/志摩大輔(P.105のみ)、近藤泰岳(P.106~108)



上/4階ロビーをレセプション方向に見る。「グッドネイチャーホテルキョウト」は、ライフスタイル提案型複合商業施設「グッドネイチャーステーション」の4階から9階に位置する。「GOOD NATURE」をコンセプトに計画されており、2020年にホテルで初めてWELL認証ゴールドクラス取得。またLEED認証も取得している。吹き抜けの中庭があり、4階は宿泊客以外の利用も受け入れている。下/ロビーラウンジをレセプション方向に見る。中庭壁面緑化以外の植栽計画は、タイナカ_オフィスが担った